
じゅうななおん

西本直希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

じゅうななおん

【Nコード】

N7129Y

【作者名】

西本直希

【あらすじ】

ゆるーい俳句部の物語。

俳句ってあれですよ。

年よりくさいとか色々言われそうですよね？

てか、作者は言われまくってます。

まあ、そんなメタ発言どーでもいいですよ。

はい、そんな訳で二人の部員新入部員なんて期待していませんでした。

それが……、

ゆるーくぐだぐだーと いきたひです。

入学

「制服の皺作らずに入学す」

4月8日、某中高一貫校の入学式の日。

一人の女子生徒が呟いた言葉は、新入生と思われる、何処か幼さが残る生徒たちの声によつてかき消された。

「それ、そのままじゃね？」

否。一人だけその呟きに反応した男がいた。

「あ、だよー。私もそう思う」

「たく、あのオバチャン顧問も面倒なもん出してくれやがって。入学を使つて俳句を大量に作れた？ こつちは春休み宿題すら終わつてねーのによ」

二人は乾いた笑みを浮かべた。

本人は気づいてはいないだろうが、彼らは場から浮いていた。

新入生募集中！ 俳句部に入つて十七音で季節を感じよう！ っ
と書かれたポスターがデカデカと貼られた長机。そこにうつ伏せになつて俳句らしきものを詠んでいるのが一人。備え付けのパイプ椅子にもたれ掛かるように座り隣の女子生徒が言った句に反応するか、今の境遇に対して愚痴を言うかしかしていないのが一人。

周りでは、熱心な勧誘が続く中、勧誘の「か」の文字分も行動を起こさないのだ。

当然、なんでお前らここに居んの？ 的な目で見られている。

そんな雰囲気にはお構い無しに、二人は続ける。

「顧問は俳句作らないだけで煩いけど、部員が入らなかつたらもつと煩いんだろーかね？ きつと」

「それは同感。でも、今時の中学生が俳句やりたがると思う？ 俺は思わないね」

「おい、最近の中学三年生！ 君はどうなるよ」

「ん？ 例外つてもんは何処にでも存在しうるもんだろ」

ぐだぐだ。よほどボキャブラリーが豊富でない限り、他の言葉で的確に言い表せないのではないかと思わず疑ってしまうレベルでぐだぐだだった。

「あー、どっかにいい新入生落ちてないかなー」

そして、この結論にたどり着く。

「落ちてるっしょ、ただ拾わねえだけでさ。まあ、美少女以外拾う気ないけど」

「黙れ、腐れド変態」

などと話していると、

「すみません、その夫婦漫才やってるお二人さん。ちょっといいですか？」

見知らぬ男子生徒から声がかかった。

夫婦漫才、と聞いた瞬間、「帰れ！」と息ぴったりに叫びそうになったが、二人は寸での所で止めた。

そう、目の前にいたのは、まさに皺一つない制服に身を包んだ、新入生らしき人だったのだ。

「新入生なのですが……」

その生徒は言う。

その瞬間、二人は悟った。

どうせ、道に迷ったから、暇そうな自分達に質問に来たのだろうと。

「俳句に興味があつてきました。是非見学させて下さい！」

二人の思考は、止まった。

「そうですか、ようこそいらっしやいました」

男子生徒は思考の止まったまま、半ば無意識のうち、棒読みで喋り始めた。

その様子に、女子生徒が戦慄している事にも気がつかず、彼は続ける。

「今日が入学式という事もあり、入学という兼題で俳句を詠んで
ます。良かったら一句、作ってみませんか？」

「了解です！」

こういうことは普通、恥ずかしがったりして、遠慮がちになるも
のだが、この新入生は違うらしい。

新入生は、先輩二人に見守られながら、少しの間目を瞑っていた
かと思うと、満面の笑みを見せた。

句が浮かんだのであろう。

二人は身構えた。

そして、

「入学といふ節目なり雲ながる」

「すまん、上手いか下手か判別つかねーや」

これが、俳句部に新入部員がハイッタ瞬間であった。

桜餅

「よう」

俳句部の部室にある男子生徒が入ると、そこには先客がいた。

部員であり、その男子生徒と同じ年の女子生徒、まつみやあおい松宮葵。そして、新入部員である。

「ケースケ、どうしたの？ 遅かったじゃん」

そして、男子生徒の名前は、ケースケこと山崎圭介。やまざききみよすけ一応、中学俳句部の部長である。

圭介は、葵の間に苦笑しながら答えた。

「ああ。おばちゃんから頼まれてさ」

と、右手に持った袋を掲げる。

「なにそれ？」

「桜餅、だよ」

言っや否や、葵の目は輝いた。椅子から腰を浮かして、圭介に詰めかける。

「ま、まさか！ おばちゃん、いえ、顧問の奢り？」

「いや、部費だって。新入生がきたら桜餅で句を作りつつ和やかに談笑してる、だってさ」

言っと、頷きながら葵は腰を下ろした。

「意外と気が利くじゃん」

今日だけで、葵の中で顧問の評価は上がったらしい。

でも、話はここで終わりじゃないんだけどね。

「でもな、俺、見ちまったんだ」

「何を？」

「顧問の机の横にあるゴミ箱にさ、この桜餅を包んでいるビニールが大量に捨てられてたんだ」

……部室の空気が凍った。

「……それ、職権乱用じゃないですか？」

今日、初めて新人部員が言う。

そんな中、葵は、

「あの、野郎！」

当然、本気でキレていた。

「なんか、句を詠む気になれない」

その一言で、今日の部活はお開きとなる。

ついでに言うと、桜餅はスタッフがおいしくいただきました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7129y/>

じゅうななおん

2011年12月16日09時56分発行